

## 平成27年度修了生 修士論文概要

論文題目：自己嫌悪感とアイデンティティの関係性について

—自己内省・自己形成意欲を交えて—

氏 名：荒井美音里

### 概 要

本研究では、自己嫌悪感が自己成長に繋がるという肯定的側面を探究することを目的に、自己内省、自己形成意欲、アイデンティティ達成との関係を検討した。対象者は女子大学生336名であり、質問紙調査を行った。結果、実証的な先行研究では、自己嫌悪感と自己内省は負の関係があったが、本研究では関連性がないことが明らかになった。また、自己嫌悪感高群は中群に対して5%水準で有意に自己形成意欲が高いことが明らかになった。さらに、自己嫌悪感と自己内省は自己形成意欲に対して正の影響を与えていたが、その決定係数は $R^2 = .055$ であり、影響力は低いことが示唆された。加えて、自己嫌悪感、自己内省、自己形成意欲はアイデンティティ達成に対して正の影響を与えており、決定係数は $R^2 = .397$ であった。しかし、回帰係数を見てみると、自己嫌悪感が $\beta = -.592$ 、自己内省が $\beta = .143$ 、自己形成意欲が $\beta = .097$ とその影響力は従属変数ごとにばらつきがあった。これらのことから、本研究の結果は、自己嫌悪感が青年期の自己形成において重要な意味を持つという従来の指摘を支持するものであったが、それはごく一部に過ぎず、青年期のアイデンティティ達成に至る道筋をすべて説明することはできないという事が分かった。

論文題目：中学生に対するソーシャルスキル・トレーニングの実践的研究

氏 名：荒嶋 千佳

### 概 要

本研究では、学校心理学の理論に基づく中学生版学校生活適応感尺度を作成することを第一の目的とした。また、中学生に対するSSTによって、ソーシャルスキル、学校生活適応感、自尊感情および学校生活享受感情の変化を検討することを第二の目的とした。

まず、研究1では、中学生242名を対象に質問紙調査を実施し、11項目2下位尺度の中学生版学校生活適応感尺度を作成した。そして、ソーシャルスキルと学校生活適応感および自尊感情の影響関係を検討した。その結果、ソーシャルスキルを高めることは、学校生活適応感における「学習・進路」、「心理社会・健康」両側面の向上につながり、自尊感情を高めることが明らかになった。

研究2では、SSTの介入有群と介入無群に分けて分析を行った。介入有群の生徒を対象に、各下位尺度得点の高群と低群に分けて2要因の分散分析を行った。その結果、SST実施前の得点が低かった生徒にはSSTの効果がみられ、「集団活動スキル」と「同輩とのコミ

コミュニケーションスキル」が向上することが明らかになった。また、SSTによって学校生活適応感と自尊感情および学校生活享受感情に対する効果はみられず、身につけたソーシャルスキルを日々の生活で使い、プラスのフィードバックを受けることでそれらの向上につながるのではないかと結論づけた。

**論文題目：**児童の遊びと心身の健康との関連

**氏名：**市川 千尋

**概要**

【目的】本研究では、児童期の子どもに焦点を当て、遊びと心身の健康の関連を明らかにする。

【方法】関東圏内のX小学校に協力を依頼し、小学3～6年生415名を対象に、小学生版QOL（Quality of life）尺度、Kid-KINDL<sup>R</sup>、遊びに関するアンケート（遊びの場所や人数、遊びのグループなど）からなる質問紙調査を実施した。

【結果】「QOL下位尺度得点」および「QOL総得点」の平均について一要因の分散分析を用いて検討したところ、遊ぶ場所については、外遊びは、内遊び（ $F(3, 369) = 5.46, p < .05$ ）や遊ばない（ $F(3, 369) = 5.46, p < .001$ ）より「自尊感情」が高いことが示された。また、ひとりで遊んでいる子どもより、誰かと遊んでいる子どもが「精神的健康」（ $F(5, 365) = 6.22, p < .001$ ）・「自尊感情」（ $F(5, 261) = 2.49, p < .05$ ）・「友だち」（ $F(5, 261) = 5.19, p < .001$ ）が高いことが示された。内遊びと外遊びどちらが好きかの質問に、外遊びを選んだ子どもは、「身体的健康」（ $F(2, 378) = 7.31, p < .001$ ）・「精神的健康」（ $F(2, 378) = 9.76, p < .001$ ）・「自尊感情」（ $F(2, 379) = 4.8, p < .01$ ）・「友だち」（ $F(2, 378) = 4.14, p < .05$ ）・「学校」（ $F(2, 378) = 3.25, p < .05$ ）・「QOL総得点」（ $F(2, 378) = 8.11, p < .001$ ）が高いことが示された。さらに、「QOL下位尺度得点」および「QOL総得点」を従属変数とし、内遊びの内容を独立変数として重回帰分析を用いて検討したところ、内遊びでも家族や友だちと話す子どもは、「QOL下位尺度得点」および「QOL総得点」（ $R^2 = .09 \sim .16, \beta = .1 \sim .28, p < .001 \sim .05$ ）となった。

【考察】誰かと一緒に遊ぶことや外遊びが望ましく、内遊びにおいてはおしゃべりなどで言語化を行うことが望ましいことが示された。

**論文題目：**中学校適応に影響を及ぼす要因の検討—中1ギャップの観点から—

**氏名：**小澤奈美子

**概要**

本研究では、中学校における適応に重要な役割を果たす要因を明らかにするとともに、小学校では適応していた子どもが中学校に入学して不適応状態になる「中1ギャップ」に

影響を及ぼす要因について検討した。

中学生124名を対象に、家庭の環境要因、親の養育態度、社会的スキルを従属変数とし、「小学校適応群・小学校不適応群」、「中学校適応群・中学校不適応群」を独立変数とした分散分析を行った結果、小学校適応では父親の年代に、中学校適応では「教師との関係」に統計的有意な主効果が認められた。「友人関係」においてのみ交互作用が統計的に有意であり、中1ギャップ群においては、「友人関係」の得点が小中不適応群に次いで低くなっており、中学校入学後の適応には友人関係で認められることが重要であると指摘された。さらに、中学校不適応の要因を明らかにするために行った重回帰分析の結果、中学校における適応には社会的スキルにおける「向社会的スキル」が高く、「引込み思案行動」が少なく、優しく思いやりがある親の養育態度が重要であることが示された。

**論文題目：**児童の学校生活スキルが居場所感及び学校適応感に与える影響

**氏名：**奥田奈津子

**概要**

本研究の目的は、小学生の学校生活スキルと学校居場所感及び学校適応感の関係を検討することであった。そこで、小学生375名に質問紙調査を実施し、有効回答347名を分析対象とした。第1に、小学生の学校における居場所感を測定する質問紙20項目について、因子分析を行った。その結果、「自由性」「心安らぐ空間」「被受容感」「自己内省性」の4因子12項目が抽出され、信頼性・妥当性のある小学生版学校居場所感尺度が作成された。

第2に、学校居場所感と学校生活スキル及び学級満足度の性差と学年差を検討するため、2要因の分散分析を行った。その結果、学校居場所感の「被受容感」は、男より女の方が高く、「心安らぐ空間」と「被受容感」は4年より5年が高かった。さらに、学校生活スキルの「進路決定スキル」と「コミュニケーションスキル」は、4年より6年の方が高かった。また、学級満足度の「承認」は、4年より5年と6年の方が高かった。よって、学校居場所感と学校生活スキル及び学級満足度の下位尺度の一部には、性差と学年差があることが明らかとなった。

さらに、学校居場所感と学校生活スキル及び学級満足度の関連を検討するため、共分散構造分析を行った。その結果、学校生活スキルが高いほど、学校居場所感が高まり、学級満足度が高くなるという適合度の高いモデルが得られた。

以上から、児童の学校生活スキルを高めることは、学校居場所感及び学校適応感の向上につながることを示唆された。

## 論文題目：効果的なメールカウンセリングの検討

—受容・共感的とコンサルテーション的アプローチの比較検討—

氏名：門倉 未来

### 概要

本研究では、メールカウンセリングにおいて受容・共感的アプローチとコンサルテーション的アプローチ、どちらがより効果があるのかを検討し、更に相談者側から見たメールカウンセリングへの全般的なイメージを収集することを目的とした。そこで2つの側面からの検討を行った。研究Ⅰでは、共感的アプローチおよびコンサルテーション的アプローチによるメールカウンセリングの効果を検討した。研究Ⅱでは、メールカウンセリングへの全般的なイメージをインタビュー調査によって収集した。これらの研究から以下の事が明らかとなった。

1. コンサルテーション的アプローチをしたとき、就活相談が恋愛相談よりも高い効果があるということが明らかとなった。また、院生群の恋愛相談ではコンサルテーション的アプローチよりも受容共感的アプローチの方が効果が高いことが明らかとなった。
2. メールでの相談者のうち、受容共感的返信文を好ましいと考える者は共感して認めてもらうこと、コンサルテーション的返信文を好ましいと考える者は専門家らしいアドバイスを求めていることが明らかとなった。また、相談内容にかかわらず、相談者はメールの利便性・即効性を重視していることが明らかになった。

## 論文題目：児童期の子どもへの母親の養育態度と子どもの欲求—心身の健康との関連—

氏名：金子 靖子

### 概要

#### 【目的】

児童期の「親から子どもへの関わり」と「子どもが求める親の機能」を調査し、その関連を明らかにすると共に、「子どもの心身の健康」との関連を検討する。

#### 【方法】

関東圏内のX小学校に協力を依頼し、小学3～6年生とその保護者519名を対象に、小学生版絵画愛情の関係検査 (Picture Affective Relationships Test: PART)、小学生版QOL尺度、親の養育態度尺度からなる質問紙調査を実施した。

#### 【結果】

PARTについて、性別と学年による二要因の分散分析を行ったところ、女兒が男児より「接近を求める」機能を「母」に求めていた ( $F(1, 207) = 5.71, p < 0.05$ )。QOLについて、親の「応答性」高低による平均値の差は、「応答性」高の方が「自尊感情」( $t(213) = 2.35, p < .05$ )、「家族」( $t(212) = 1.99, p < .05$ )、「学校生活」( $t(213) = 2.38, p < .05$ )、

「QOL総得点」( $t(211) = 2.62, p < .01$ ) で高かった。「応答性」高低とPARTの「母」高低を組み合わせた4群におけるQOLの平均値を検討したところ、「応答性」高群「母」高群が「応答性」低群「母」低群より有意に、「自尊心」( $F(3, 211) = 2.52, p < 0.05$ )、「家族」( $F(3, 210) = 3.37, p < 0.05$ )、「QOL総得点」( $F(3, 209) = 3.62, p < 0.05$ )が高かった。

#### 【考察】

「母」の「応答性」が低く「子どもが求める親の機能」が低いとQOLも低くなることから、子どもが求める親の機能に適切に親が応答することが重要だと考えられる。

**論文題目：**特別支援学校教員が支援対象児のリソースを認知することによる心理的効果の検討

**氏名：**鹿子田陸月

#### 概要

近年、障害の多様化・重度化により困難事例が多く見られる特別支援教育場面において、支援対象児のリソースの認知をすることが、双方に良い相互作用を生じさせる働きや支援者の心のゆとりにつながるのではないかと考えた。

そこで本研究では、支援者が支援対象児のリソースを認知することによる、支援者の心理的効果（子どもの理解・関わり方）を明らかにすることを目的とし、リソースシートの記入による介入を用いたPre・介入期間・Postからなる調査を実施した。特別支援学校教員6名より調査の協力が得られ、以下の見解が得られた。

- ①一週間の調査期間では、支援対象児の困った行動の変化はほとんど見られなかった。
- ②支援者は支援対象児の一番のリソースの認知することが、児童生徒の見立てにおいて肝心である。
- ③リソースシートの記入は、もとより支援対象児に対して抱いていた肯定感情やリソースの意識がより明確化させる働きがある。
- ④リソースの認知が、支援対象児に対する肯定的な関心を高め、調査協力者の行動や手立てに繋がり、良循環を促す作用が示唆された。
- ⑤10年未満群は、支援対象児のリソースが意識化されたことで、改めて支援対象児への肯定的な感情やリソースシートの記入による心理的効果が比較的顕著に見られた。
- ⑥10年以上群は、リソースの認知により現時点での支援対象児の見立てや手立てを振り返り、今後の支援計画の再認識を促す働きが見受けられた。

**論文題目：**母親用被援助志向性尺度の開発および関連要因の検討

**氏名：**悉知 弥生

#### 概要

本研究では、研究1にて母親用被援助志向性尺度の開発を行い、研究2にて被援助志向

性と育児不安および自己隠蔽の関連を検討することを目的に、A幼稚園の母親210名に質問紙調査を実施した。

研究1：母親用被援助志向性尺度の項目は、予備調査および本田ら（2011）の尺度を参考に研究者らが作成した。因子分析の結果、「援助資源の自覚」、「援助への期待」、「援助抵抗の低さ」、「情報希求」の全22項目4因子構造であることが明らかとなった。また、内的整合性および基準関連妥当性が示された。

研究2：仮説1「育児不安が強いと、被援助志向性は高い」と仮説2「自己隠蔽が弱いと、被援助志向性は高い」を立て、重回帰分析を行った。その結果、仮説1は一部支持され、仮説2は支持された。また、「援助資源の自覚」に対して自己隠蔽、育児感情が負の影響、「援助への期待」に対して、中核的育児不安が正の影響、育児感情が負の影響、「援助抵抗の低さ」に対して自己隠蔽が負の影響、「情報希求」に対して自己隠蔽が負の影響、中核的育児不安が正の影響を与えていた。これらのことから、育児不安は、被援助志向性を促進し、自己隠蔽は被援助志向性を抑制することが明らかとなった。

今後は、育児不安といった悩みの深刻さだけでなく、自己隠蔽という母親個人の特性にも注目していく必要があると思われる。また、援助に繋がりにくい母親を減らすためにも、支援者からの積極的な介入が重要であることが示された。

## 論文題目：現代の女子学生における潜在的キャリア意識に関する研究

—女性の人生課題（結婚と育児）を背景として—

氏名：篠崎 恵

### 概要

本研究では、現代の女子学生が結婚・育児を通して「働き続けること」について、どのような深層イメージをもっているか明らかにすることを目的とした。調査対象者は、関東圏内の女子学部生50名および大学院生（女子）13名であった。結婚（子ども無し）、結婚（子ども有り）をそれぞれ想定した2種類の刺激文を提示し、刺激文に続く物語を作成してもらった。研究Ⅰでは、作成された物語を結末別に分類し、現代の女子学生のキャリア意識における将来展望を検討した。研究Ⅱでは、計量テキスト分析を用いて、現代の女子学生の深層イメージを抽出し、検討した。これらの研究から、以下の事が明らかとなった。

1. “子ども無し群”においては、仕事と家事の両立を選択した者は半数近くに上った（47%）。反対に、仕事を辞めることを選択した者は1人もいなかった。“子ども有り群”においては、半数を超えた者（65%）が仕事と家事の両立を選択した。仕事を辞めることを選択した者はわずかであった（6%）。
2. “子ども無し群”において、自分の家族や外部のリソースを使わず、家事への協力という形で夫が変われば、現状は乗り越えられるとイメージしている女子学生が多いこ

とが明らかとなった。“子ども有り群”において、調査対象者が今現在働いていない状況であったとしても、仕事・家事・育児の三つ巴の状況が大変であることはイメージできていた。それにも関わらず、仕事で帰りの遅くなる夫に対して感謝の意を示していたことから、ワークライフバランスへの意識の課題が明らかとなった。

**論文題目：**解釈バイアス及びその関連要因が青年期女子の対人恐怖心性へ及ぼす影響

**氏名：**清水 藍

### **概要**

本研究の目的は、予測バイアス、コストバイアス、自己関係づけをそれぞれ認知の特徴と捉え、その特徴が対人恐怖心性にどのように影響を及ぼすかについて検討することであった。さらに、自己効力感、ソーシャルサポートという自助資源、援助資源が認知の特徴と対人恐怖心性の間で緩衝要因になりうるかについても検討することを目的とした。女子大学生 (N=319) を対象に予測バイアス、コストバイアス、自己関係づけを外生変数として行った共分散構造分析の結果、いずれの認知の特徴を持つ者にも対人恐怖心性を感じやすく、自己効力感が低く、ソーシャルサポートを得にくい特徴が認められた。さらに、予測バイアスと対人恐怖心性との間では自己効力感が、自己関係づけと対人恐怖心性の間においては自己効力感とソーシャルサポートが緩衝要因となりうることが示された。しかし、コストバイアスと対人恐怖心性の間では緩衝要因となる資源は認められず、認知の特徴が直接的に対人恐怖心性へ大きく影響していることを本研究結果は指摘した。

**論文題目：**バーやスナックに勤務する女性の感情労働、職場環境と精神的健康の関連

**氏名：**寺澤 麻衣

### **概要**

感情労働は、「仕事の一部として、組織的に望ましい感情になるよう自らを調節する心理的過程 (Zapf, 2002)」と定義されている。土井 (2014) によれば、感情労働は必ずしもバーンアウトにつながらず、感情労働をしていることがバーンアウトにつながっている場合とそうでない場合がある。しかし、その背景要因については検討されていない。本研究では、バーやスナックの仕事に従事する女性の感情労働従事者の精神的健康度を把握すること、さらに感情労働が直接バーンアウトや精神的健康につながっている場合と、繋がっていない場合を量的尺度を用いて分け、その背景要因をインタビュー用いて質的に検討することを目的とした。その結果、量的尺度では感情労働得点と同じ程度でも精神的健康が高い者と低い者がいることが示された。その背景要因をインタビューを用いて質的に検討すると、店長の方針の有無、ノルマの有無、自身のコントロールの仕方によって抑うつが高まることが考えられた。一方で、物理的な報酬としてのお金、精神的な報酬としての

店長からの賞賛や客の反応が抑うつが高まるのを予防しているのではないかと考えられた。職場環境によって抑うつが高まることが考えられたため、職場環境の見直しを図ることによって、抑うつ気分になることの予防やバーンアウトの予防につなげられるだろう。本研究では、調査人数が少ないためより確かなデータを得るために人数を増やし、インタビューを行って明らかにすることが今後の課題である。

**論文題目：**ジェンダーからみた食行動異常—摂食障害患者と女子大学生の比較—

**氏名：**新 彩子

### **概要**

【目的】本研究では摂食障害とジェンダーの関わりについて新たな知見を得るために、「精神健康度が悪いと食行動異常が高くなる」、「摂食障害と診断された者は、一般の女子大学生と比べてセックス型が多い」という2つの仮説を検証することを目的とした。【方法】摂食障害患者（患者群）43名と一般女子大学生（一般群）139名を対象に、質問紙調査を行った。質問紙は（1）説明文書、（2）フェイスシート（年齢、身長・体重）、（3）日本語版Eating Attitudes Test-26（食行動異常）、（4）ダイエットの動機に関する自由記述（5）Bem Sex Role Inventory日本語版（性役割を測定する尺度、女性性尺度と男性性尺度のみ採用）、（6）日本語版The General Health Questionnaire（精神健康度）である。【結果】仮説の検証から①精神健康度が食行動異常に影響を及ぼしている、②患者では女性性が低く男性性が高いクロスセックス型の人数が多いことが明らかになった。また、ダイエットの動機についての質的分析の結果では、患者群で4つの大グループ（痩せの追求、自罰的行動、太ることからの回避、他者や社会からの影響）、一般群で2つの大グループ（痩せの追求、太ることからの回避）が生成された。そして概念図から、①患者群では、ダイエットに至るまでのメカニズムが複雑である、②患者群では病理性のみられるような自罰的な記述があった。【考察】内在化された女性性の獲得が摂食障害の回復にとって重要であると推察された。そして、摂食障害の治療では、食行動の異常のみに焦点を当てるのではなく、内在化された女性性の獲得、自罰的な行動や過剰な自己統制についても焦点を当てる必要があるだろう。

**論文題目：**中学生に対するソーシャルサポートが共同体感覚及び学校適応感に与える影響

**氏名：**久野 優実

### **概要**

本研究の目的は、研究1で中学生版共同体感覚尺度の開発を行い、研究2でソーシャルサポートと共同体感覚及び学校適応感の影響関係を明らかにすることにある。

研究1では、中学生847名のデータを用いて因子分析を行った。その結果、十分な信頼

性・妥当性のある中学生版共同体感覚尺度（全22項目）が作成された。

研究2では、中学生717名のデータを用いて、まず性別・学年の2要因の分散分析を行った。その結果、①女子の方が男子よりもソーシャルサポートを感じ、「生徒相互の人間関係」を良好に捉えていること、②1年生は他学年より「母親のサポート」を感じ、「教師と生徒の人間関係」を良好に捉えていること、③1・3年生は、2年生より「学習意欲」が高いことの3点が明らかとなった。次に、「ソーシャルサポート」、「共同体感覚」、「学校適応感」の影響関係について分析を行った（共分散構造分析）。その結果、ソーシャルサポートを認知するほど共同体感覚が高まり、学校適応感も高くなるという影響関係が明らかとなった。ソーシャルサポートの種類では「道具的サポート」と「評価的サポート」、提供者別のソーシャルサポートでは「友だちのサポート」と「担任の先生のサポート」が、特に効果的であることが示唆された。しかし、「友だちのサポート」は、共同体感覚を介せば学校適応感の「学習意欲」を高めるが、直接影響する場合、「学習意欲」を低減させることが明らかとなった。このことから、「友だちのサポート」が「学習意欲」という学校適応感を促進させる上で、共同体感覚の果たす役割の大きいことが示唆された。

**論文題目：**反芻と省察を分ける要因としての目標意識およびコーピングを介した精神身体的健康

**氏名：**八木あずさ

**概要**

本研究では、自己注目における反芻と省察を分ける要因の検討と、反芻および省察が精神身体的健康度に与える影響にコーピングがどのような効果を及ぼすか検討することが目的であった。女子大学生を対象に目標意識、反芻・省察、コーピング（問題解決・積極的認知対処）、抑うつ症状、身体症状を測定する尺度を用いた質問紙調査を実施した。共分散構造分析を行った結果、目標意識は反芻に負の影響を及ぼしており、省察には正の影響を及ぼしていることが示唆された。次に、コーピングを介した省察および反芻の抑うつ症状への影響モデルを比較検証した結果、省察単独では抑うつ症状に正の影響を及ぼすが、省察からコーピングに正の影響、コーピングから抑うつ症状に負の影響を及ぼすことが指摘された。一方、反芻ではコーピングの影響は有意とならなかった。身体症状でも同様の分析を行ったところ、反芻、省察ともに身体症状に正の影響を与えていたが、コーピングの影響は明らかとならなかった。本研究の結果により、目標意識が自己注目において反芻と省察を分ける要因になる可能性が示された。また、抑うつ症状、身体症状の両方において、反芻も省察も2つの症状を高めてしまうが、抑うつ症状においては省察がコーピングを介することで抑うつ症状を軽減させる適応的働きを示すことが指摘された。